

自然誌 **だぶり** 春

Natural history

三重自然誌の会情報誌 112号

2017年 6月

わが家もヤモリデビュー

わが家は、松阪市の西郊、堀坂山(757m)の裾野に連なる丘陵地を開発した住宅団地の一角にあります。この団地は1978年に日丘町として誕生し、私は1991年から住んでいます。当地は、造成前の数年間は牧場として利用されていましたが、もともとは里山でしたので、ため池、田、雑木林でまわりを囲まれており、本誌99号(清水2014;事務所で観察した生きもの)でも紹介したように、いろいろな生きものを観察することができます。例えば、庭でカナヘビが交尾をしていたこともありますし(写真1)、今の時期ですとたくさんのトカゲの子どもが出てきますので、どこかで産卵しているのでは



写真1 交尾中のニホンカナヘビ, 2006年7月18日

う。一方、おなじ爬虫類でも家屋を生活の拠点にすることが多いヤモリは、もと里山であったことが影響してかこれまで見たことがありませんでした。ところが昨年、ついにわが家にも出没しました。

9月のある日、夕食をつくっていると台所の窓に黒い影が見えました(写真2)。これはひょっとしたらと思い、カメラを手に外へまわって西日避けのすだれをそっとめくると、「なんだい!」という顔の1匹のヤモリがいました(写真3)。里山から住宅団地に変わって38年目の出来事です。同じ団地の住人にお聞きすると、その方のお宅では3~4年前から出没しているそうです。いずれにしても、家屋棲ヤモリの生息空間として三十余年を経てやっと認識されたこととなります。



写真2 窓に映った妖しい影, 2016年9月23日



写真3 影の正体はニホンヤモリ, 同

しみず ぜんきち
〈清水 善吉: 松阪市日丘町 1386-17〉

タイワンタケクマバチが明和町に

篠木 善重・大石 久志

タイワンタケクマバチ *Xylocopa tranquebarorum* は、台湾、中国南部～インドに分布するミツバチ科の蜂で、わが国では2006年に愛知県豊田市で最初に確認され、その後、名古屋市や岐阜県安八町、長野県松本市からも記録され、インターネット上の情報によると静岡県、京都府宇治市、大阪府でも生息が確認されており、急速に分布を拡大している外来種です。三重県内への侵入については、いなべ市、四日市市、菰野町で2015年に発見されています（川添2016）。

本種は、枯竹に営巣する習性があり、竹箒や竹柵に直径20～25mmほどの穴を開けます。横に寝かせた竹には営巣しません。中国から輸入された竹材から日本に侵入してきたと考えられています。愛知県では、在来のキムネクマバチの生態や竹材に悪影響を与えるとして、対策が必要な外来種のひとつとして平成23年3月30日に公表し、対策を訴えています。

キムネクマバチは背中黄色毛が目立ちますが、本種の胸部は真っ黒です(写真1, 2)。人に対する攻撃性はありませんが、メスには毒針がありますので驚かせないように気をつけたいものです。

筆者らは、双翅目の調査で訪れた明和町内の祓川堤防上で本種を得ているので報告します。

記録

多気郡明和町上村祓川堤防, 1♂, 13-IV. 2017, 大石久志採集

標本は三重県総合博物館に寄贈する予定。

文献

愛知県環境部自然環境課. 2011. 条例に基づく移入種の公表について. <http://www.pref.aichi.jp/kankyo/sizen-ka/shizen/gairai/jorei.html> (2017年5月参照)

川添昭夫. 2016. 三重県に進入したタイワンタケクマバチ. ひらくら, 60(3), 78.

国立環境研究所. 2017. 侵入生物データベース. <https://www.nies.go.jp/biodiversity/invasive/DB/detail/60530.html> (2017年5月参照)



写真1 キムネクマバチ, 2014. 7. 15, 松阪市松名瀬海岸



写真2 タイワンタケクマバチ♂, 毒瓶から取り出して撮影

〈しのぎ よしげ：津市河芸町中別保 2230-1・おおいし ひさし：京都市山科区川田御出町 50-15〉

事務局から

○紀伊半島3県フィールドワーク交流会⑩「大杉谷」開催

7月22～23日(土・日)の日程で行います。詳細は同封案内をご覧ください

チュウシャクシギ，ペリットを吐く

今堀聖史

チュウシャクシギが好物のカニを捕らえ、足をもぎ取って飲み込む場面はよく目にします。消化できなかった甲殻などを塊（ペリット，写真1）にして吐き出すのですが，実際に観察したことがありませんでした。そのシーンを偶然に写すことができたので紹介します。

昨年8月20日，松阪市松崎浦町の三渡川河口で5羽のチュウシャクシギが採餌したり，水浴して羽繕いしたりしていました。羽繕いの後であくびのように見える動作をしていたのを丁寧に写し，パソコンで見るとペリットを吐き出す瞬間が写っていました(写真2)。撮影していた時に気付かなくて残念ですが，吐き出すときのしぐさがわかりましたので，今後は観察の機会をつくれそうです。

ペリットの大きさを写真で推定すると，太さ2～3cm，長さ4～5cmで粘液に包まれているのがよく判ります。吐き出されたペリットは満ち潮になればバラバラに散らばってしまいます。チュウシャクシギは渡りの季節に数羽～数十羽の群れでテトラポットに休んでいますが，ペリットは波浪でなくなっていくだろうと思います。写真1のペリットは雲出川古川の河口に近い堤防に残されていたものですが，吐き出した位置が数cmずれたら堤防に残らなかったでしょう。大きさから考えてチュウシャクシギのもので，小型のカニを食べたあとのペリットだろうと思います。

チュウシャクシギは体長75～80cmで，海岸や近くの水田でも採餌する旅鳥です。8月下旬から9月上旬に群れで渡ってきて南下し，ハマエンドウが咲く4月中旬から5月中旬に北上していきます。浜風に吹かれてのんびりと見るのに適した鳥です。

鳥の姿がない時，ふとペリットに気付くときがあって，落とし主は誰かを詮索するのもおもしろいです。最近見つけたペリット（写真3）はたくさんの状況を語ってく

れました。人間の食物は多様で世界には様々な食文化がありますが，鳥たちのそれも人間以上に多様性に満ちたものだと想像できます。鳥見の日々は尽きない面白さが転がっています。



写真1 カニの甲殻が混じった堤防上のペリット（雲出川古川，2015年11月23日）



写真2 あくびのようにしぐさでペリット(赤丸)を吐き出すチュウシャクシギ(三渡川河口，2016年8月20日)



写真3 ネズミの頭骨が入ったペリット，フクロウと推定(茶臼山高原小鳥の森，2017年4月28日)

（いまほり きよふみ：津市久居小野辺町1454-30）

ミシシippアカミミガメの産卵と孵化を観察

篠木 善重・締次 美穂

ミシシippアカミミガメ *Trachemys scripta elegans* は、その和名からも知れるようにアメリカ合衆国のミシシipp州などに自然分布するヌマガメ科の外来種で、耳のあたりに赤い筋模様がある。

筆者らは、2000年から津市河芸町の田中川干潟周辺の生き物を調査しているが、田中川やその周辺



写真1 産卵巣を掘るミシシippアカミミガメを発見

水路の堤防で群れを成して日光浴をしている本種と遭遇するのは日常的事となつている。そのなかで、2008年に干潟の南端に位置する排水機場敷地内で本種の産卵行動を、また2000年には本種の孵化も観察しているので報告する。

2008年6月25日17時1分、河芸町上野の芦原排水機場敷地内、粘土質の山土を入れて造成した土地で、海岸堤防から10m余り進んだ進入路の左端に静止する本種を発見(写真1)。その場所は平素から真夏の西日が差し込み、土は堅く乾燥した状態となつていた。水路際の堤防で日光浴する個体なら、人の姿を見つけるやいなやすぐに水路に飛び込むはずだが、見つけた個体は近づいてもまるで動かない。お尻の周りの土が泥状になっているのを確認できたので、これは産卵行動だと確信した。2台のデジカメを使用し、動画を含む写真撮影を行った。



写真2 右後肢を巣穴に入れて掘るようす

地面が堅い場合は体内に蓄えた水を排泄し、地面を湿らせてから穴を掘るとされている(安川2007)。カメには、総排出腔という、糞尿の排泄も産卵にも使う器官がある。まずは、この総排出腔から「体内に蓄えた水」を出し(観察できていないが)、山土を湿らせ、土をこねて泥状にして巣穴を掘り進めていく。巣穴を掘る作業は、後肢のみを用い、しかも、左右の後肢を交互に使っていた(写真2)。

17時20分、最初の卵が総排出腔から出てきた(写真3)。その1分後に2個目の卵が出てきた。さらにその1分後に3個目、17時24分には最後の5個目を産み落とした。産卵数の5個は、撮影した画像で確認できた個数である。筆者らが産卵現場を発見した時、すでに液状化した山土が出ていたので、巣穴を掘る作業時間は20分以上を要していたことになる。



写真3 総排出腔からの産卵始まる

産卵を終えたカメは、直ちに穴を埋め始めた。

両後肢を使って、泥状の土と後肢周辺の乾燥した枯草と小枝を丁寧にこねて、その後、片方の後肢を使って、こねた土を穴の中へ入れていく。穴の中に空洞ができないように(そのように感じさせる動きをしていた)、丁寧に埋め戻しているようすであった。とくにその後半の作業は、両後肢の爪を含む先端部分を使って、土を巣穴の中に押し込むような動きを何度も何度も繰り返していた(写真4)。

17時44分、カメはすべての作業を終えて、茂みの中へ消えていった。巣穴の埋め戻し作業に要した時間は20分であった。43分間の観察の間、このカメは、一度も後ろを振り向くことをしなかった。その直後に、巣穴があった場所を改めて確認しようとしたが、泥状の土はかけらも見当たらず、笹類の枯葉や木くずなどの配置も周辺部との違和感がなく、さきほどまで本種が産卵していた場所を特定することができなかったのである。産卵巣をカモフラージュする本種の能力はパーフェクトであった。

この産卵行動の観察時から遡ること8年、仲間たちと生物調査中の2000年9月3日、堤防を挟んだ南側の芦原海岸で、堤防際の砂の中から本種が孵化してくるのを見つけた(写真5)。さらに産卵巣の中から1個の卵を取り出すと、中から殻をつつく音がかすかに聞こえてきた。卵角と呼ばれている鼻先にある突起で卵殻を破ろうとしているのだと仲間の一人が解説してくれた。卵を掌に載せて観察していると、しばらくして孵化した(写真6)。本種の孵化を観察したのはこの時限りである。以来、汽水域に生息する本種の産卵場所は、堤防際の砂浜だとばかり思い込んでいた。2008年の産卵現場に遭遇する時までは、

最後に、この観察記録を発表するように何年も前から勧めていただいていた清水善吉氏に感謝すると共に、発表が遅れたことをお詫びする。

文献

国立環境研究所.2017.侵入生物データベース. <https://www.nies.go.jp/biodiversity/invasive/DB/detail/60530.html> (2017年5月参照)

安川雄一郎.2007.アカミミガメ属(スライダガメ属)の分類と自然史1. クリーパー, (36):30-50.

〈しのぎ よししげ:津市河芸町中別保2230-1・しめつぐ みほ:津市河芸町上野560-14)



写真4 産卵巣の埋め戻し作業



写真5 芦原海岸堤防際の孵化現場



写真6 孵化する子亀

夜間調査の土産写真—ツバメの巣をめぐらにする鳥は？

今堀聖史



写真1 なぞの「黒っぽい鳥」, 2017年5月2日, 伊賀市奥鹿野 (清水善吉・撮影)



写真2 イソヒヨドリのメス, 2011年10月19日, 鳥羽市安楽島町



写真3 カワガラスの幼鳥, 2011年4月13日, 津市一志町波瀬

夜の川徘徊がご趣味の清水善吉さんから、「5月2日の夜間調査で橋桁のツバメの巣に鳥が寝ていました。何でしょうか？」と黒っぽい鳥が写った画像が送られてきました(写真1)。その橋がある場所について詳しく知らないうえに、夜間に鳥の観察をしたことがほとんどありません。写っている鳥の特徴を、自分が観察した記憶や図鑑の写真と照らし合わせて推定してみました。

体長と羽色、胸の斑点(あるように見える)、橋桁のツバメの巣などの条件を考えてイソヒヨドリのメス(写真2)、カワガラスの幼鳥(写真3)の2種を考えてみました。イソヒヨドリにしては体長(特に尾羽)や嘴が短い、カワガラスの成鳥にしては体色の黒味が強くて胸に斑がありそうなので巣立ち雛ではないかと推定しました。しかし、橋のある伊賀市奥鹿野の柏尾川周辺でイソヒヨドリの声を聞いたことがないとのこと、「ついでに橋の下を覗いてみてください」というやり取りですませました。

しかし、何だろと気になって、以前に訪れたことがある場所なので「ついでに」ではなく黒っぽい鳥のヒントを探しに現地へでかけました。柏尾川に架かる小さな橋は水面から橋桁まで2m強でツバメの巣が一つと巣の跡があるだけでした。集落や周辺にイソヒヨドリの姿はなく、推定した1種の名は消えました。可能性があるのはカワガラスの巣立ち雛、4月中旬に巣立ったと考えると1羽で行動しているかもしれませんし、清水さんが別の場所にいた個体に気付かなかったかもしれません。ツバメの巣にいたのは「一夜の宿」だったのだらうと思いました。

カワガラスの巣立ちを二ヵ月観察したことがあります。1羽が巣立った翌日に2羽目が巣立ちましたが、1羽目の雛は巣立った日に約100m下流まで親鳥に誘導されて移動し、岸から張り出した水面から10cmほど上の枝で夜を過ごしました。翌日巣立った2羽目の雛も下流へ誘導され、三日目には所在を探せませんでした。「黒っぽい鳥」が橋桁にいたのは5月2日、カワガラスは通常4月中旬に巣立ちますのでかなり飛ぶ力もついてツバメの巣へ止まることもできるだろうし、体色も変化しているに違いないと考えました。

1枚の写真の主は今もあいまいなままですが、謎解きをするのにフィールドを見て感じ、考えることも大事なあと改めて思っています。

〈いまほり きよふみ：津市久居小野辺町 1454-30〉

岐阜県博物館にあった桑名市多度町産カスミサンショウウオ標本

清水善吉

三重県におけるカスミサンショウウオ *Hynobius nebulosus* の産地の一つとして、「桑名郡の丘陵地帯」と記載された文献記録がある（岩間春男1951; 日本生物地理学会報, 15巻2号）。しかしながら、この記録には詳細な地名や確認日時が記載されていないため、分布情報としての扱いに困ることが多く、県内の小型サンショウウオの分布記録をまとめた最新の報告（清水善吉2014; 三重自然誌, 14号）には採用されていない。ちなみに、この記録を多度町としている文献もある（富田靖男1980, 三重県立博物館研究報告自然科学, 2号）。桑名郡で丘陵地が存在するのは多度町だけという根拠とのことであるが（富田私信）、予測は外れていなかったことが図らずも判明したので報告する。

本年2月19日、以前に志摩半島のカスミサンショウウオ調査で一緒したこともある岐阜高校の高木雅紀先生から「桑名の地名」という件名のメールが届いた。そこには、岐阜県博物館の両棲類標本を生徒と一緒に整理していたところ、カスミサンショウウオ標本の一つが岩間春男さん採集の三重県産で、添付のラベルは達筆でうまく解読できないが、「桑名郡古浜村御衣野」と読むことができる。この地名は現在の「桑名市多度町御衣野」で間違いないか、とあった。

さっそく、手元にあった角川地名大辞典24三重県で調べると、古浜村は、明治22年～昭和30年の桑名郡の自治体名、力尾・猪飼・北猪飼・御衣野の4村が合併して成立、昭和30年多度町の一部となり、4村名を大字として継承とあった。さらに念のため、古浜村御衣野は現在の桑名市多度町御衣野で良いかと桑名市教育委員会に確認後、間違いないと高木先生に返信した。あわせて、編さん中の「みえ生物誌」のデータとして掲載したいので、ついては文献として使用できるようにどこかに報告していただけないかと依頼したところ、高木先生からは、岐阜県博物館の説田健一学芸員と相談した結果、そちらで報告してほしいとの連絡があった。みたこともない標本についての報文を書くわけにもいかないので、日程調整のうえ3月15日に関市にある岐阜県博物館を訪問し、標本調査を行った。

標本は、ホルマリン液浸となっており、成体5個体が一つの標本瓶に収められ、瓶には採集場所は「桑名郡」とだけ記されたラベルが貼られていた（写真1）。また、標本と一緒にラベルが2枚入っており、1枚は瓶に貼られたラベルと同じ内容（写真2左）、もう一枚には「桑名郡古浜村御衣野」と記されていた（同右）。前者は博物館でつけたラベル、後者は採集者の岩間さんが記録したものと思われる。たしかに達筆であるので、博物館で登録する際に桑名郡以降の地名が読みとれなかったのであろう。この標本のデータは次のようになり、機会をみて博物館ラベルにも追記されると思われる。



写真1 桑名郡産カスミサンショウウオ標本（岐阜県博物館収蔵）

□登録番号 GPM-Z-101：カスミサンショウウオ 成体5個体，1949年3月21日・岩間春男採集，三重県桑名市多度町御衣野。

この標本が，桑名郡の丘陵地帯に分布する（岩間1951）根拠の一つであることは間違いないと思われるが，当時をもっと広範囲に生息していた可能性もある。三重県北部における本種の生息記録地は，いなべ市員弁町楚原，多度町小山（以上，清水2014）および多度町御衣野の近接する3地点のみであるが，少なくとも，この辺り一帯の丘陵地は生息地であったのであろう。

しかしながら，最後の生息地であった多度町小山の産卵場が住宅団地造成のために潰されることになり，その際に卵の移転が行われたが（清水2004；本誌，61号），その後の経過調査では定着が確認されていない。多度町小山・御衣野から員弁町楚原にかけての丘陵地一帯はゴルフ場や住宅・工業団地の開発が目白押しであるので，本種の生息状況の精査と保全は緊急の課題である。

最後になったが，情報をおよせいただき，岐阜県博物館との仲介をさせていただいた高木雅紀先生，標本調査について便宜を図っていただいた説田健一学芸員，また，発表について許諾していただいたことについても両氏に深謝する。

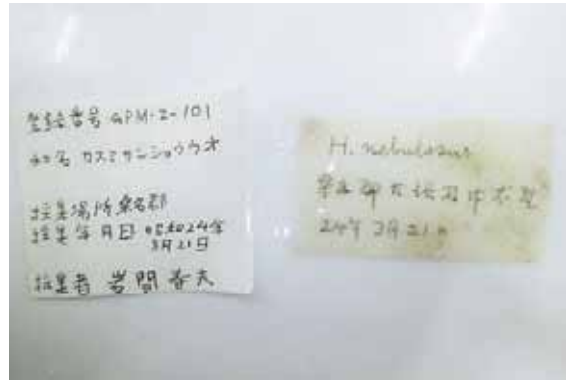


写真2 標本瓶の中にあつたラベル，詳細は本文参照

〈しみず ぜんきち：松阪市日丘町1386-17〉

会員の本

日本産ゴミムシダマシ大図鑑 秋田勝己/益本仁雄・著

A4判，302頁 2016年11月30日 むし社 定価（18000円＋税）

日本産ゴミムシダマシ科464（「良いムシ」と読むらしい）種を網羅した図鑑である。ゴミムシダマシ科とはどんなグループか？本書の序等を読んでも私にはわからなかったが，ゴミ溜のような一群で，言い方を変えれば形態・生態の多様性に富んでいるらしいことは理解できた。たしかに，図鑑をめくっていくと，これって別の種？と思うほどよく似た種が延々と並んでいたかと思うと，本当に同じ科なの？と疑ってしまうような種もあつたりして，意外と（失礼）見ても厭きない図鑑である。本書を調査研究のために購入する人は，世界中でも手足の指の数で足りてしまうと思われるが，生物多様性を眺めて楽しみたい方にもお勧めの一冊である。いやひょっとしたら，これからの時期，室内に飛び込んでくるジミーな虫の名前が判るかもしれない。秋田さん曰く，残部僅少とのこと，購入希望者は「むし社 TEL03-3383-1461」まで。



編集後記

3人×2編の原稿で編集しました。ゴミムシダマシのように多様性に富んだ内容の会報を目指していますので，たくさんのご投稿をお待ちしています。次号は9月発行予定です（善）。

自然誌だより112号

発行日 2017年6月10日

事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17

清水善吉方 三重自然誌の会

<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会

郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会

年会費 1,500円（個人）/2,000円（家族）

e-mail: mie-shizenshi@zb.ztv.ne.jp